

ナラ枯れの被害記録を探る—明治期の記録

高畑義啓

現在、本州および九州南部で、カシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* が *Raffaëlea quercivora* という樹木病原菌を媒介することで生じるナラ類やシイ・カシ類の集団的な枯死現象、「ナラ枯れ」が発生している。ナラ枯れおよびこれと関連する被害について、過去の被害記録を詳細に検討した。その結果、明治・大正期のナラ枯れと思われる被害記録が存在することが分かった。これは、ナラ枯れの確実な被害報告として今まで言及されてきた中で最も古い 1930 年代の記録より、さらに 50 年以上古いものである。

研究の方法：ナラ枯れは古くから知られており、最初の確実な被害報告から約 80 年の歴史を持つ。ナラ枯れの長期的な被害拡大や発生条件を明らかにするため、過去のナラ枯れ被害について、網羅的に文献上の被害記録を調査した。

なお、九州地域でもナラ枯れは発生しているが、現在までのところ、被害は宮崎県と鹿児島県の一部に限定されている(図-1)。主な被害樹種はマテバシイであるが、本州におけるミズナラやコナラとは異なり枯死率はそれほど高くなり、被害地域も本州のような急激な拡大を見せていない。ただし、枯死に至らないカシノナガキクイムシによる穿孔被害は恒常的に発生している(写真-1)。

結果の概要：今回調査を行ったもののうち最も古い被害記録は、矢野宗幹(1919)による「従来本邦ニ於テ大発生ヲナセル森林害虫ニ就テ」(山林広報 大正 8 年第 6 号: 453-470)であった。これはナラ枯れに関してこれまで言及されてこなかった文献であり、記述は下記の通りである(原文は縦書き。漢字は筆者が現行の字体に修正した)。

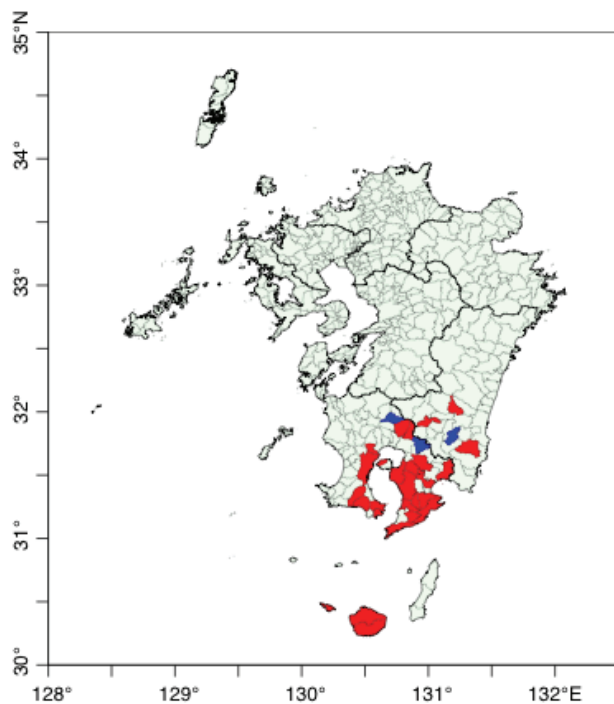


図-1 九州地方でナラ枯れ被害の記録がある市町村

赤は 1980 年代末以降の被害が報告された市町村、青は 1980 年代末より前の記録のみがある市町村。

(六) ならのながきくひむし

成虫ハおほなら(筆者注: ミズナラを指すと思われる)ノ

樹幹ニ穿孔シテ蕃殖シ遂ニ是ヲ枯死セシムルモノニシテ
栃木県塩原附近ニテハ明治十三年頃ヨリ発生シテ漸次お
ほならハ枯死シ尽スト同時ニ害虫ハ移動シ明治十九年頃
福島県河沼郡ニテ約五十町歩ノ被害ヲ見タリ又新潟県東
頸城郡ニテハ大正二年ヨリ四年頃マテ発生シ殆ト此ノ樹
種ハ枯死セリ

同報告中で矢野は、この昆虫の学名を *Crossotarsus* sp. としている。ミズナラが激甚な被害を受けていること、被害地が比較的広域で移動していること、カシノナガキクイムシは当初 *C. quercivorus* として記載されたことなどから考えて、この被害は現在のナラ枯れと同じ現象であった可能性が非常に高い。そうであれば、1880 年頃、既にナラ枯れが発生していたことになる。なお、上記の被害地のうち、福島県河沼郡および新潟県東頸城郡では 1980 年代末以降にナラ枯れが発生しているが、栃木県では 1980 年代末以降のナラ枯れの被害報告はない。

ただし、現在この和名を持つ昆虫は存在せず(後藤秀章私信)、種々の樹木害虫や本邦産ナガキクイムシ科の古いリストにも「ナラノナガキクイムシ」の名は見えない。とは言え、明確に養菌性キクイムシによる加害として記録されたものの中では、これが日本国内で最も古い記録であると思われる。



写真-1 カシノナガキクイムシの穿孔(矢印部)被害を受けたマテバシイ(宮崎県児湯郡都農町)